

笑ってごらん

第 616 号 H. 30. 3. 6 発行

～今日のことば～

志を立てて

以て万事の源と為す

(吉田松陰)

◇◆1 日、梅の花ほころぶ中、卒業式を終え、547 名の若鳥たちが巣立っていった。それぞれ進む道は異なれども、「その場になくなくてはならない人財」を目指して自分向上に努めて欲しいと願う。文字通り卒業に「花」を添えてくれた「梅」もそうであるが、厳しい冬の寒さに耐えてきた草木の芽がいま芽吹き始めている。今年は例年に無く冬の寒さが厳しく、私たちも慣れない雪に四苦八苦した訳であるが、そんな中、草木はジッと耐えていたことになる。自然の力の偉大さを感じる。『二月の雪、三月の風、四月の雨・・・これらが美しき五月をつくる』・・・以前どこかで見かけたお気に入りの言葉である。「季節の移り変わりとともに、雪・風・雨など過酷な自然現象があるが、その厳しさの後には五月、花々や新緑に囲まれることになる。私たち人間の生活においても同じで、様々な苦勞を強いられることもあるが、その後には素敵な状況が待っている。だから今をしっかりと頑張れ」とのエールと受け止めている。 ◆梅

をはじめ「木」という存在は、その成長の在り方や温もりなどにおいて幅広く物事の引き合いに出される。現代は技術革新が進み、全てにおいて機械化が進んでいるために「無機質」に感じられることが多くなってきている。そういう現代だからこそ、木の温もりが求められるのだろう。先日、ある雑誌で伝統工芸の分野で日々熟練の技を磨いている方の記事を目にした。ある地域に伝わる漆器についての内容であったが、塗り物の素材となる木のことを「木地（きじ）」と呼び、「木地に浮かび上がっている年輪などの木目を見せる」ために「木地師」（そういう役目があることすら知らなかった）と「塗師（ぬし）」（この役目の呼称も初めて知った）の連携、協同作業が良き品を作り上げるのだそうだ。「匠とは自らの仕事と、使う側に対しての責任感をもち続けられる人のことだ」とのコメントが印象的だった。また、別の雑誌にはバイオリン職人の記事があった。職人という仕事は、実際、コツコツと研ぎの練習をしたり、木を削ったりする地味な作業の繰り返しであり、そうした地道な努力に耐え続けられるかどうか最も肝心。情報化社会の現代。自分にとって都合の良い情報が山ほど入ってくるので、「あれ、こっちの方がいいんじゃないか？」とってしまう。そうすると、自分の中にある軸がブレはじめ、目の前にある本当にやらなければならないことが疎かになってしまうので、一流の職人にはなれない、とのこと。良いモノを作るには、木と対話し、心を通わせることができなければならないようだ。どんな職業に就くであっても、これらの考え方は通ずるものがあると感じる。精魂込めた責任ある仕事を行う必要がある。



感謝道

◇◆今日からは2年生が修学旅行に赴くため、高校校舎内は1年生のみとなってしまう淋しい限りである。専門課程校舎では、2年生を送り出した後、昨日より看護学科3年生対象の「専門課程入学準備セミナー」が開始されているので人の数としてはあまり変わらないが、意識新たな取り組みがスタートしている。卒業の感慨に耽る間もなく、時は新年度へと動き始めている。一つひとつの物事に対し、気持ちを切り替えて臨まなくてはならない。